

恐怖の3ヶ月

3ヶ月に一回季刊発行の小誌『ロコハウス倶楽部』…妻に道楽と言われながらも丸7年がたちました。

「記事を書く暇がよく有りますね？」なんて言われるのですが、3ヶ月のリズムの中で余裕も生れ、また妻の悪口を記事の中に織り込んで細やかなストレス解消をしたり…結構気に入りのペースなのです。

しかしこの3ヶ月はペースが狂いました。前号を発送した1月17日に『関西大震災』…これは絶対に次号のテーマと3月の中旬に記事を書き上げ、厳しい妻の検閲もパスしてフロッピーに入れておいたのですが3月20日に『地下鉄サリン事件』。

この3ヶ月間に他にも『警察庁長官狙撃』や『円の80円突破』エトセトラ……。まさか…まさかの連続で『関西大震災』が遠い昔のようになってしまい、記事の書き直しを余儀無くされました。

何が起きるかわからない現代、まさかのための“保険”…やはり大切ですよ。

平成7年 4月
角 倉 健一朗

ロコハウスにて…28

AT ROCO HOUSE

第二十八回目 トレンディ?13歳年上女房

道善 ひろ子さんの巻

学生時代から美人の誉れ高かい人でした。しかし男まさりの性格で「ありゃ一生結婚しそうも無いね」と仲間内で囁いていたのです。そんな彼女が9年前、突如ひと回り以上違う男性と結婚、亭主(日経の編纂)の転勤でパリ在住後、昨年帰国したのです。3月のある日「地震保険に入るから話を聞かせてよ」という電話がありました。



～新丸子(東横線)の駅前の喫茶店にて～

道善：「悪いわね、本当は我が家に来てほしいんだけどお昼まで寝てたからまだ掃除もしてないの」

私：「今、働いてるの？」

道善：「何もやってないわよ、亭主が為替担当の記者をやってるから毎日帰宅が午前様なの、だから朝出勤させたら又ひと眠りするのよ」

私：「結構な御身分だね、亭主は文句言わない？」

道善：「言わない、言わない、年寄りは大切にしるって教育してるから」

私：「かわいそうに…で、そもそも彼とはどういうきっかけで知り合ったんだっけ？」

道善：「私が通産省で水墨画を教えた時に大勢でディスコに行った事があったのよ、その時隅っこで一人“大根踊り”みたいなものやってんのがいるからオイ！チョッとこっちへ来い！って言って指導してやったの、そいつが通産省担当の記者をやってた彼だったの。」

それから何故かなつかれちゃってね、よく逢ったけど弟みたいなもんで男としての意識なんかまったく無かったのね…、私が39歳の時『あなたが40になる前に結婚したい』って、年齢なんてどうでもいいのに変わってんのよ、でも婚約するまで13歳も離れてるとは思わなかった、彼って老けて見えるのヨ」

私：「東大出だって？」

道善：「それもどうでもいいの…結婚前に私の父が彼氏は大学ぐらいは出てるのかって聞くの、そう言えば何年も付き合ったけど知らなかったの学歴なんか興味無いし、新聞記者やってるくらいだからどっかの3流大学ぐらい出たんじゃないって答えたぐらいヨ」

道善：「それはそうと新聞配達やってんだって？」

私：「ハイ！あなたの亭主は書く人、私は配る人」

道善：「F君が深刻そうに知らせてくれたのヨ」

私：「ハイ！昨年の暮れから、毎朝3時に起きて正月も雨の日も雪の日もくじけずに配達しております」

道善：「でも逆に少し太ったんじゃない？」

私：「ハイ！毎朝の労働の後の朝食が美味しいこと…つついっ食べ過ぎております」

道善：「さっきからあっちこち痛そうにしているけどどうしたの？」

私：「ハイ！昨日娘と乗馬をいたしまして筋肉痛で…」

道善：「なに、優雅な生活をしてるじゃないの？」

私：「何が優雅なのですか！聞いて下さい…先日妻と娘が“乗馬教室2日間無料御招待”に当選したと大喜びをしているのです、こんなもの会員募集の宣伝で誰にだって当たるのに…妻がせっかく当選したんだから娘と二人で行って千葉県成田まで…それも日曜日連続で早朝から夕方まで…僕の睡眠不足を回復させる唯一の休日にかわいそうとは思わないのかって言ったら妻は何と言ったと思います『あなたを乗せる馬はもっとかわいそう』だっ…グスッ(泣)………………同情するなら契約くれ！！」

道善：「そう思って電話したんだけど、ちっとも悲愴感がつたわらないネ…さあ地震保険の説明してヨ」

私：「…したがって保険料は合計13600円」

道善：「じゃあ毎月それだけ払えばいいのね？」

私：「何をおっしゃいます年間の保険料だよ、それなら毎月1万円の年金でも入ってよ」

道善：「年金か…私、長生きしそうだし…」

私：「絶対長生きするよストレスなささうなもの」